

「初めに言があった」

ヨハネによる福音書 1:1-14

みなさん、新年あけましておめでとうございます。今日は 2022 年の最初の主の日です。この年の初めを、礼拝をもって始めることが出来ることを大変意義深く思います。

今日与えられた聖書の箇所は、ヨハネによる福音書の初めの「序文」の部分です。この福音書の最初に記されている言葉は「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」という言葉です。ちょっと読んだだけでは何のことか、分かりにくいことかも知れませんが、この言葉は、聖書の一番初めの創世記の 1 章 1 節以下の言葉と深く関わっているのです。その創世記の最初の言葉は、「初めに、神は天地を創造された」という言葉です。ここにも「初めに」という言葉が最初に記されています。

この世の一番初め何があったのか、聖書は「初めに神が…」と、初めにあったのは神であって、この神によって、天地のすべてのものが造られたということを述べています。初めに存在したものが神さまで、私たちを含めたすべてのものが、その神によって造られた「被造物」であるということは、私たちが、まず何よりも神さまのことを第一にすべきだ、ということの意味します。私たちは普段、自分のことを第一とし、自分の考えや自分の判断、自分の都合、自分の願いなどを優先させて、自分の思い通りに生きていますが、「初めに、神が天地を造られた」ということは、何よりも私たちが第一にしなければならないことは、神を神としてあがめるとのことなのです。その意味で、私たちがこの新しい年を迎えて、まず礼拝をもって一年の歩みを始めることは、とても大切なことなのです。

神さまは、その天地創造の業を「言葉」をもって始めました。混沌として闇に包まれたような<無の世界>に、神が「光あれ」と命じたら「光があった」というように、神さまはすべての創造の業を「言葉」によってなさいました。神さまの言葉には命と力がありました。

ヨハネ福音書の記者は、神さまのそのような天地創造の業を心に思い描きながら、福音書の序文の言葉を綴ったのです。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」と。ヨハネ福音書の記者は、ここで、神さまの天地創造の業が「言葉」によってなされたことに注目し、その「言葉」自体に、新たな出来事を生み出す命と力があることに注目しているのです。

ヨハネ福音書によると、その神の言葉に「言」(げん)という一字を当てて「ことば」と読ませています。これはギリシャ語原文では「ロゴス」という特別な言葉で、私た

ちが一般に使う言葉とは違う、生きた人格的な力を持った言葉なのです。

ヨハネ福音書の記者はこの「ロゴス」という特別な言葉を用いて、実は「キリスト」のことを語っているのです。つまり、イエス・キリストは、天地が造られる前から、神と共にあって、神と等しいお方、否、神であった、というのです。「言は神と共にあった。言は神であった」とありますように、イエス・キリストは神によって造られた方ではなく、初めから神と共におられた方であり、神ご自身でもあられたのです。

私たちはよく「主イエス」とか「主イエス・キリスト」と言いますが、「主」という言葉は、本来神を表す言葉です。私たちの信仰は「イエスを主と告白する」信仰です。イエス・キリストが神ならば、当然、初めから神と共にあり、天地創造の業にも関わられたはずです。これがヨハネ福音書の記者の信仰なのです。ですから、3節では、「万物は言(ロゴス)によって成った。成ったもので、言(ロゴス)によらずに成ったものは何一つなかった」(3節)と詠われているのです。神さまが言葉によって天地すべてのものを造られたように、キリストは神の「言」(ロゴス)として、天地が造られる前から、神と共におられ、そのすべての創造の業に関わった、という壮大な信仰の歌がここで歌われているのです。これは、当時の教会の中で歌われていたキリスト賛歌(讚美歌)の一節であったと言われ、「ロゴス賛歌」と呼ばれていたものです。

ヨハネ福音書の記者は、この福音書の冒頭で、この讚美の言葉を引用しながら、14節で、このように記します。「言は肉となって、私たちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた」。

「言は肉となった」。この「肉」は、私たち人間の肉の体のことです。神と等しいお方が、私たちと同じ人間となられて、この世に来られたということです。これがクリスマスの出来事なのです。クリスマスは、ただ単に「イエスさまのお誕生日」ではないのです。神が人となってこの世に来られたという画期的な出来事なのです。

使徒パウロは、このキリストの誕生についてフィリピの信徒への手紙の中で次のように記しています。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分となり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、十字架の死に至るまで従順でした」(2:6-8)と。これは神の子イエス・キリストの「へりくだり」について記した言葉です。神と等しいお方が、自分を無にして、「肉」をとり、人間となられたというのです。イエスさまが宿られた「飼葉桶」は、そのへりくだりの低さを物語るものであり、十字架の死に至る従順さを示すものであったのです。

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」。私たちの神は抽象的な神ではな

く、具体的に生きて働く神なのです。「具体的」という言葉は、体を具えると書くわけです。神さまが「肉の体」をもって「わたしたちの間に宿られた」それがイエスマなのです。「肉」は、本来、被造物としての人間の弱さ、脆さ、はかなさを示す言葉です。この肉のゆえに私たちは「肉の欲」に振り回され、罪を犯すのです。ギリシヤ人は「肉」を、「知性を閉じ込める牢獄」と考えていました。この「肉」のゆえに人間は、理性的判断が出来ず、愚かな過ちを犯すからです。この肉の故に、私たちは病んだり、悩んだり、苦しんだりするのです。私たちの神は、このような「肉」をとって、私たちと同じ人となってこの世に来られ、「わたしたちの間に宿られた」のです。

なぜ、神と等しきキリストが、そこまで身を低くして「肉」をとり、人となられる必要があったのでしょうか。まず第一に、神の「恵みと真理」を私たち人間に伝えるためでした。私たち人間は、神によって造られた被造物であるにもかかわらず、神から遠く離れ、神さまがいくら天から呼びかけても、神の声を聞きえないものとなってしまいました。神さまは、そのような私たちを御許に呼び寄せ、その御心を知らせるために、私たちと同じ「人」となって、私たちの間に宿られる必要があったのです。

こんな話を何かで読んだことがあります。アメリカのある農家のクリスマスの夜の出来事です。家族みんなで、教会のクリスマスの賛美礼拝に出かけることになっていたのですが、特別寒い夜であったこともあって、その家の主人だけは、「俺は寒いからいやだ。クリスマスは俺とは関係がない」と言って、一人、暖炉のそばでテレビを楽しんでいたそうです。やがて庭で鳥の騒ぐ声がするので出てみると、ツグミでしょうか、たくさんの渡り鳥が、強い風と寒さのために飛べなくなって、庭に降りて来ていたのです。彼は可哀そうに思って、なんとかその小鳥たちを納屋に入れて保護しようとして、納屋の戸を大きく開けてやりましたが、小鳥たちは納屋に入ろうとしません。納屋が暗くて分からないのかなと思って、納屋の電気をつけに行ったのですが、それでも鳥たちは、庭で震えているだけです。主人は餌でもやれば安心するだろうと思って、トウモロコシの種を蒔いて納屋まで誘導しようとしたのだそうです。それでも小鳥たちは怯えて、応じようとしません。その時、農夫はしみじみと思ったそうです。「ああ、俺が小鳥になれたなら、この小鳥たちを救ってやれるのに」。その時教会の鐘が鳴って、彼はハッと気づいたのです。「そうだ、クリスマスは、神さまが私たちを滅びから救うために、自ら貧しき人となられて来られた日だ」と。そこで彼は、急いで教会に駆けつけ、途中からでしたが、家族と一緒に御子の降誕を喜び祝ったというのです。私たちは、人となられた神の御子イエス・キリストを通して、初めて、神さまの愛と、深いみ心を知ることが出来るのです。

なぜ神の御子が、「肉」をとり、人となられたのか。その第二の理由は、神が私たち人間の肉の弱さ、脆さ、はかなさ、罪に寄り添い、連帯されたということではないでしょうか。へブライ人への手紙の中に、イエスキリストについて、「(彼は)私たちの弱さに同情できない方ではなく、罪は犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです」(4:15)と語られています。イエス・キリストは、私たちの「肉」をとられたことによって、私たちの肉の重荷を負って、私たちの様々な悩み苦しみを担って、十字架に掛かれたのです。私たちを肉による罪の縄目から解放するためです。私たちが、クリスマスを祝ったということは、「父の独り子としての栄光を見た」ということであり、神の深い「恵みと真理」とにあずかった、ということです。福音書の記者ヨハネは、そのことを5節で「光は暗闇の中で輝いている」と言い、9節では「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである」と述べています。

私たちが住むこの世は、依然として「暗闇」に包まれているように見えます。新年を迎えたとはいえ、決して明るい年の夜明けではありません。新型コロナウイルスの蔓延が少し下火になったかと思いましたが、新しいオミクロン株が世界中に蔓延し、日本でも第六波が心配されています。そのような中で、世界の国々や民族間の争いや対立・紛争が止むことなく、アメリカと中国、ロシアとウクライナとの緊張が高まり、日本も台湾有事に備えて軍備を拡張し、憲法まで変えて戦争に向けての準備がなされつつあります。今はまさに「闇」が支配しているように見える時代です。どこにも希望がないような、不安な時代です。

しかし、私たちは主の降誕を通して、神の御子が「肉となって、わたしたちの間に宿られた」という出来事を通して、「暗闇に輝く光」を見ることができました。

混沌とした闇の世界に、「光あれ」と言われて「光」を生じさせた主は、光をもってこの世を支配しておられるのです。その光は、今も「闇の中で輝いている」のです。どんなにこの世の闇がこの世を覆っているように見えても、闇が光に勝つことはないのです。その光は、この世の「すべての人を照らす」まことの光です。

11年前の東日本大震災の夜。停電で地上の全ての光が消えた時、被災した人々は、恐怖と不安の中で、これまで見たことのないような、夜空にきらめく満天の星に心を癒され、ほのかな希望を与えられた、との報告を聞きました。闇の深さの中で、光はその輝きを増すのです。「わたしは世の光である」(ヨハネ 8:12)と言われた主イエス・キリストを仰ぎ見つつ、どんな時にも希望を失わずに、イエス・キリストを通して与えられた光を輝かせて、私たちもこの年、「星のように輝く」(フィリピ 2:15)のものでありたいと願います。

アーメン